

研究課題	さあ、今度は君が話せよ。
副題	～タブレットと「読み深めカード」で実現する、主体的・対話的で深い国語の学び～
キーワード	ICT、主体的・対話的で深い学び
学校名	私立立命館守山中学校
所在地	〒524-8577 滋賀県守山市三宅町 250 番地
ホームページ アドレス	http://www.ritsumei.ac.jp/mrc/

1. 研究の背景

本校は 2014 年度から生徒全員が iPad を所持している。今や全教科での iPad の利活用は定着している。ただ、その活用の仕方は教材提示、課題提出、インターネットを使った調査活動、各種連絡などである。本校の生徒、教員は今、より効果的な iPad の利活用を求めている。また大学附属校である本校では、大学受験がない。そのため、iPad 導入以前から生徒は大学受験に必要な知識・技能だけでなく、解のない問いに対する思考力・表現力も強く求められてきた。この思考力・表現力は授業中での発言等によって表出するが、受験がない環境のなかで、多くの生徒たちは知識・技能よりも、聴衆を引き付ける話し方（例えばノリがいい話し方）や生徒間での対話により価値をおいてきた。しかし、国語を例にとれば、授業で聴衆を引き付ける話し方や対話ができる生徒が必ずしも文章を的確に読んでいるわけではない。わたしたちは今、主体的・対話的な学びによって生徒の思考力・表現力を育てると同時に、文章を的確に読むことができる知識・技能をも確実に育てる必要がある。そのために、iPad と今回独自に開発した「読み深めカード」を組み合わせた、新たな ICT の取り組みに着手する必要がある。

2. 研究の目的

私たちが目指すのは、主体的・対話的で深い学びの実現であった。

「主体的な学び」は「学ぶことに興味や関心を持つ」ことや学ぶことに「見通しを持って粘り強く取り組む」こと、「対話的な学び」は「子供同士の協働」や「教職員」等との「対話」等を通じ、「自己の考えを広げ深める」こと、「深い学び」は「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすること」と文科省は説明している。私たちは「読み深めカード」と iPad を使って、国語の特質に応じた「見方・考え方」を可視化し、生徒が国語の予習に見通しを持って粘り強く取り組めるようにし、その予習をもとに、授業でのディスカッションで子供同士が自己の考えを広げ深める対話を成立させようとした。

3. 研究の経過

この研究の目的・意図は前述の通り、主体的・対話的で深い学びを実現することであった。それを達成するために、私たちは「読み深めカード」という独自開発の教具を使った（写真1）。この「読み深めカード」とは、国語の特質に応じた「見方・考え方」を記した48枚の名刺サイズの紙製カードである。このカードは国語の授業で物語文や説明文を学習材に、ディスカッションをするための、各生徒の予習を可能にした。



写真1 読み深めカード

このカードがあれば生徒はあらかじめ文章の何に注目して考察をすればいいかが分かるので、多くの生徒が自宅での予習で途方に暮れずにすんだ。例えば「その天候や風景にどのような効果があるのか」というカードは、物語文おける風景・天候描写と登場人物の心情を結びつける「見方・考え方」を提供するカードである。国語が得意な生徒はもともとこの風景・天候描写を見逃すことはないが、そうではない生徒はそこに気づかないため、何を考えたらいいか分からず、予習もできないし、授業でディスカッションに加わることもできなかった。しかし、このカードがあれば、どの生徒も「見方・考え方」を明確に理解することができ、予習やディスカッションへの参加ができた。

また、このカードには全てQRコードを添付した。このQRは、教員が各カードの使い方を教科書掲載の文章を例に解説している、YouTubeの動画リンクであった。したがって、生徒がもし自宅で考察に困れば、自分のiPadでそのQRを読み込み、動画を見てヒントにすることができた（この動画は教科書著作権協会に許可申請し、協会と各文章の著作者に許諾をもらった）。したがって、この「読み深めカード」は紙のカードでありながら、iPadから動画を視聴できる、ICT教具でもあった。

このようなしくみでなされた予習をもとに、授業でディスカッションを行った。低学年では、あらかじめ教員が指定した数枚のカードでディスカッションを行うため、完全に同じ観点での対話が促された。学年が進むに従い、教員が指定したカードのうちから、個人で数枚のカードを選んで考察するという取り組みもできた。

また、ディスカッションで特徴的な発言をした生徒群を放課後に召集し、再度ディスカッションを実施・録音し、それを生徒たちの学習番組としてYouTubeで発信した。

加えて、本校公開研究授業でこの「読み深めカード」を使った授業実践を公開し、授業後の特別部会等での取り組みに対する学校の内外の教員の評価を交流した。さらに、助成申請者である犬飼が神戸女学院大学の「国語科教育法」の講師を務める機会を得て、教職を目指す大学生に「読み深めカード」を使った授業を体験

してもらった。また、これら実践の一部を整理し、2019年2月には全国で先進的なICT活用を進める教員たちと共著で書籍を出版することができた（『ICTで変える国語科授業』明治図書）。この出版と関連して、2019年2月にこの書籍購入者を対象に「読み深めカード」のワークショップを開催し、多くの参加者を得た。

年間通じて生徒の反応や多くの方から頂いたフィードバックをもとに「読み深めカード」の改良を重ね、最終的にバージョン4.3を業者に依頼して印刷・制作し、生徒に提供することができた。

4. 代表的な実践 「読み深めカード」を使ったカードバトル

私たちはこのカードを使って、生徒が対一で行う、対話形式のカードバトルを行った。これは生徒が自分で選んだ「読み深めカード」の「見方・考え方」を使って、教材に対する考えや思いを構築し、カードを出しながら対一で対話する取り組みである。このカードを使った対話は、周りの生徒が判定役となって、勝敗を決めた（写真2）。



写真2 カードバトル

教材は内山節著の説明的文章、「歴史は失われた過去か」（教育出版2017年）であった。歴史を単なる知識ととらえるのではなく、身体記憶としてとらえ、人間と歴史の新しい結びつきを考察しようという内容だ。

実践前と実践後にそれぞれアンケートを取った。アンケートを比較すると、「対話的な学び」において以下のような変化が見られた。アンケートの対象者は立命館守山中学現3年4組・5組全63名である。

「国語の授業で自分の意見を発表できたか」という質問に対し、「よくできた」「まあできた」と答えた生徒の合計は実践前42.2%だったのが、73.4%に上昇した。

「友だちの考察に対する自分の評価を伝えて、友達の考察の深まりに考察できたか」という質問に対し、「よくできた」「まあできた」を答えた生徒の合計は実践前54.7%だったのが、79.7%に上昇した。

つまり、授業で自分の意見を発表し、友だちの意見に対し自分の意見を伝え、互いの考えを広げ・深める「対話的な学び」を実現した生徒が増えた。

また生徒の予習のノートからは「主体的な学び」における変化も見られた。実践をはじめた当初、予習ノートをギッシリと考えで埋めてきた生徒は22%に過ぎなかったが、実践の終わりごろには70%になった。前述の通り、文科省によると「主体的な学び」は「学ぶことに興味や関心を持つ」ことや学ぶこ

とに「見通しを持って粘り強く取り組む」ことである。したがって、このノートから「主体的な学び」を実現した生徒が増えたと言える。また国語の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる「深い学び」にも変化が見られた。ここでの「深い学び」はカードが示す「見方・考え方」を使って、自分の考えを作文で表現することとする。これが実現できた生徒は実践前25%だったが、実践の終わりには97%になった。つまり、国語の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた生徒が増えた。

生徒1名の作文を次に示す。この生徒は学習に粘り強く取り組む「主体的な学び」はすでにできていた。ただ、国語の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる「深い学び」に改善の余地があった。

作文の問い—歴史の記憶の価値とは何か。

初発の作文

歴史は正直言ってあんまりおもしろくない。じゃあなぜ学んでいるのか？そう思ったとき、歴史を知ること、昔の時代を生きた先人たちの姿や知恵を学ぶことができている。また、歴史は成功と失敗の繰り返しだとも思っている。過去の過ちから学ぶこともできるし、成功から学ぶこともできると思う。歴史を学ぶことは、将来役に立つか、立たないかわからないけど知っておけば必ず役に立つと思う。

学習後の作文

歴史の記憶の価値とは、①筆者の意見は、知識と遠い昔から受け継がれてきた感覚をともしなう身体
記憶が、補足をしあい、人が創造的に生きる力を強めることである。僕の意見は、歴史の記憶の価値は、
これからの人生においてとても役に立つものだと思う。②例えば、僕たちは、去年長崎に行き原爆の恐ろ
しさを学んだ。そうすることで原爆の恐ろしさを体験することができた。そして戦争はいけないと思
った。これからの人生においてもとても深く関係するのが、歴史の記憶の価値だと思う。

初発の作文は素朴な自分の考えにとどまるが、学習後は傍線部①で「文中の言葉でまとめる」というカード（見方・考え方）を使い、②で「自分の同じような経験を説明する」というカード（見方・考え方）を使って自分の考えを表現している。したがって、国語の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる「深い学び」が改善させることができた。

5. 研究の成果

この研究の評価は一つ目に、各単元の最後に課す、生徒の作文に書かれた内容で行った。作文から、「読み深めカード」で可視化した「見方・考え方」を生徒がどれだけ働かせることができたかを確認した。

2018年9月にカードを使わずに行った実践では、これらの「見方・考え方」が生徒の作文に一人あたり平均3.66個使われていた（被験生徒59名）。一方2018年12月にカードを使って行った実践では、これらの「見方・考え方」が生徒の作文に一人あたり平均5.03個使われた（被験生徒58名。上記と同講座）。

このように、生徒が働かせることができた「見方・考え方」は増加した。

二つ目の評価指標はベネッセの学力推移調査のスコアであった。本研究の中心対象であった中学3年生の特別進学コースの国語平均偏差値は4月から10月の半年間で1.7ポイント上昇し、本校史上最高の数値を

記録した。

三つ目の評価指標は、9月に実施したベネッセの総合学力調査のスコアであった。本研究の中心的な対象であった上記講座の平均得点率（総合学力調査は偏差値を出さない）は4.2%上昇し、これも本校史上最高の数値であった。

この研究の成果は、年間5回の校内で公開授業を行うことに加え、年に二回の対外公開授業、学校HPでの広報を繰り返すことで学校内外の周知を得て、定着をはかった。また、私たち自身が校外の研究会で発表し、広報に努めた。

これらの成果発表に関わって、校内外から様々なフィードバックを頂いた。

6. 今後の課題・展望

本研究を進め、生徒のアンケート、作文、校内外から頂いた様々なフィードバックを検討した結果、読み深めカードの文言、分類に改善の余地があることがわかった。

私たちは「読み深めカード」を「主体的・対話的で深い学び」を実現する教具として意味づけし、授業実践を行ってきた。しかし48枚のカードはいまだ各カードの役割を明確に分類されておらず、未完成である。今年度の研究の結果、現在は鶴田清司（1995年）の論考に従い、最終的に制作した「読み深めカード」のバージョン4.3では、「教材内容・教科内容・教育内容」という三つの分類でカードを分け、より効果的な指導を模索することになった。しかし鶴田の分類にも実のところ、よく分からない部分がある。私たちは「教材内容」の指導とは教材に書かれた情報を正確に取り出す「見方・考え方」を指導することと考えている。「教科内容」の指導とは教材に表れる言葉のしくみを理解・運用する「見方・考え方」を指導することと考えている。「教育内容」の指導とは教材から受け取ったものから自分の生き方を問い、創造するための「見方・考え方」を指導することと考えている。しかし、この私たちの考えは鶴田の論考と多少違うようにも思う。

7. おわりに

本年度の研究の結果、ICTと「読み深めカード」を組み合わせた本校の取り組みが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に一定の効果を持つことが分かった。しかし、前述の通り、カードはその文言・分類に改善の余地があり、未完成である。

このカードをきちんと完成させ、本校の子どもたち、さらには全国の子どもたちにカードの利用を広げ、より多くの子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」を実現してほしい。私たちはそう願った。そんな私たちの願い・夢を私たちが所属する立命館学園が認め、来年度は本研究の中心である犬飼龍馬教諭を立命館大学大学院教職研究科出向させ、この「読み深めカード」の実践・研究・完成を実現する環境を整えることになった。来年度は犬飼教諭が同大学院井上雅彦教授のもとで全国のすぐれた授業の実践研究を重ね、カードの分類を明確にする。また、授業見学を繰り返し、各授業のエッセンスを抽出し、それをさらにカードにしたり、自分たちの血肉としていく機会も多かろうと思う。授業見学をする学校は井上教授の勧めに従うほか、神戸大学附属中等教育学校、大阪教育大学附属中高、京都教育大学附属中高、東大寺学園、同志社中高はじめ、すぐれた実践家がいる学校を想定している。

8. 参考文献

- ・ 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申）」（2016 年 12 月 21 日中央教育審議会）
- ・ 「新しい学習指導要領の考え方―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―」（2017 年 8 月 10 日文部科学省生涯学習政策局情報教育課 情報教育振興室長 安彦広斉）
- ・ 「中学校学習指導要領〈平成 29 年告示〉解説」